

私の対女性共感覚記録

2010年7月24日

岩崎純一

掲載サイト：<http://iwasakijunichi.net/>

以下は、私が女性に見ている共感覚色の出現頻度を、女性の月経の中日と排卵日とを直径にとり、記録したものである。(中心0%、円周上100%。グラフの色は共感覚色ではなく、便宜的な色分け。) ¹

女性に共感覚色が見える確率は、月経期間と排卵日が圧倒的であり、それ以外の日については、「あまり特定の色が見えず、月経期間と排卵日だけが私に感知されやすい女性」から「月経期間・排卵日とあまり差がない女性」まで様々で、年齢による傾向差はない。ただし、常に共感覚色が見えやすい女性でも、月経期間・排卵日とそれ以外の期間とで、共感覚色の色相や明度自体が変化するので、分かりやすいことも多い。すなわち、月経期間や排卵日に見える色合いがそれ以外の日には薄い、というだけで、代わりに他の色が見えていることが多い。

なお、排卵日から次の月経までの日数は、多くの女性で比較的違いが小さいが、月経から排卵日までの日数差は個人差が激しい。従って、図の円の右半周と左半周とでどちらを速く回るかは、女性によって異なるが、女性の個々人の体質や心理状態に依拠するものであるため、和時計のように日数のほうを柔軟に歪めて、月経期間中日と排卵日とが必ず直径に来るようにした。このような記録法を続け、各女性の共感覚色の出現頻度を重ねていくと、ちょうど女性の外性器のような縦長の形状を描く。無論、偶然である。

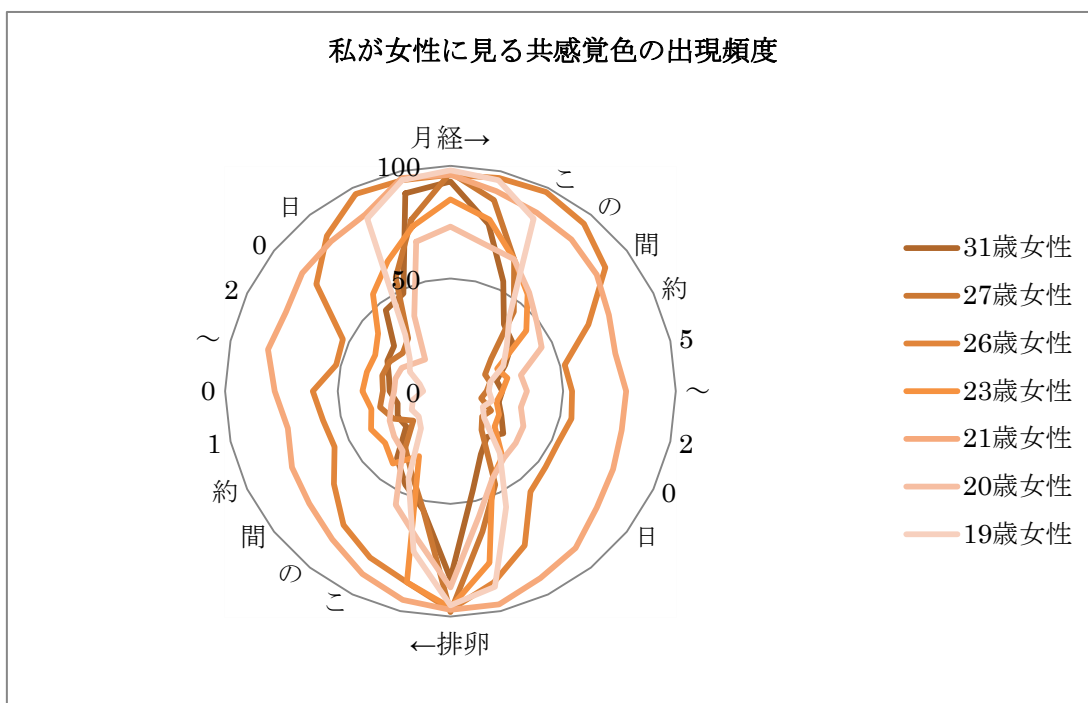
この結果を、卵胞刺激ホルモン・黄体形成ホルモン・エストロゲン・プロゲステロンの濃度と比べてみると、排卵日女性に対する共感覚の鋭さについては、前者三つのホルモン濃度に従っているように見えるが、エストロゲン・プロゲステロン濃度がともに上昇する排卵数日後から見える共感覚色は、月経期間や排卵日に見える共感覚色とは異なっていること、四つのホルモン濃度の全てが低下した状態にある月経期間中にも排卵期と同じ共感覚色が見える場合もあることから、女性の体内のホルモンだけを直接的に感知してこのような結果になっているとは考え難い。

唯一、卵胞期と黄体期とでおおまかに二分できるとの意味では、私の対女性共感覚は女性の基礎体温に従っていると見ることもできるが、対女性共感覚が、一般男性でも稀に感じうる女性の「ほてり」といったものとは別のものである以上、ホルモン濃度・基礎体温・

¹ 女性によっては、体質や心理状態によって半年ほど排卵・月経が来ないこともあるが、掲載した図は、各女性の体調や心理状態が比較的良好なときの排卵・月経周期を示したもの。排卵・月経がないときには、ほとんど同心円状になる。

女性の外見上の変化（肌荒れ・化粧の乗りの良し悪しなど）といった個々の要素だけを取り出して対女性共感覚の根拠と見ることはできないと考える。あるいは、現代一般の男女の五感に基づく「女性の身体に対する解釈」がホルモンや基礎体温であるとするならば、これと同等に、対女性共感覚者男性の知覚世界に基づく「女性の身体に対する解釈」が共感覚色や共感覚音と見るほうが妥当だと考えられる。

また、ホルモンや基礎体温といった言語的・記号的な知識の媒介なしに女性の身体情報を認識できる点で、対女性共感覚者男性の女性に対する知覚世界は、ほとんど他の霊長類・サルのオスの知覚世界と同等であるのかもしれない。この意味では、対女性共感覚は、女性の身体に対する「解釈」と言うよりは、「ありのままの動物的知覚」と言えるのかもしれない。



基礎体温・ホルモン濃度との比較

